

藤井千晶著

『東アフリカにおける民衆のイスラームは何を語るか——タリーカとスンナの医学』

ミネルヴァ書房、2018年、定価5,000円＋税、255頁

星野佐和*

中東地域を起源として北アフリカ、西アフリカ、中央アジア、東南アジアと世界各地に広まったイスラームは、各地域でその実践が多様化してきた。中東地域を離れて多様化したイスラームの実践は、これまで中東を中心とした「公式イスラーム」の対極にある「民衆イスラーム」として、劣位に置かれてきた。本書は、東アフリカに位置するザンジバル島においてイスラームの民衆化を促した「タリーカ（教団）」と、現在活発に行われている「スンナの医学」に焦点を当て、中東の公式イスラームに対して劣ったものとしてみなされる傾向にあった民衆イスラームではなく、民衆を主役とした「民衆のイスラーム」を描き出すことを目的としている。全4部13章からなる本書の構成は以下の通りである。

- 序章 多様な民衆イスラームへのいざない
- 第Ⅰ部 東アフリカにおける民衆のイスラームへの視座
 - 第1章 民衆のイスラーム
 - 第2章 東アフリカ沿岸部の概要
- 第Ⅱ部 東アフリカにおけるタリーカ
 - 第3章 東アフリカのタリーカ
 - 第4章 タリーカと預言者生誕祭
 - 第5章 ザンジバルにおけるタリーカをめぐる状況
- 第Ⅲ部 東アフリカにおけるスンナの医学
 - 第6章 預言者の医学
 - 第7章 「イスラーム的」医療と精霊の関わり
 - 第8章 ウガンガとスンナの医学の比較
 - 第9章 スンナの医学の実践
- 第Ⅳ部 東アフリカにおける民衆のイスラーム

*HOSHINO Sawa 京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程

第10章 イスラームの知の変遷

第11章 伝統と改革のはざままで

終章 移り変わる民衆のイスラーム

はじめに、各章の概要を述べる。序章では、東アフリカにおけるイスラーム研究の動向と本書の目的が述べられている。著者は、東アフリカのイスラームに関する研究が手薄であること、またそれらは迷信的であり、土着の要素が混交したものであるとみなされてきたことを指摘している。このような背景を踏まえて、著者が本書の目的として掲げるのは、東アフリカにおけるタリーカとは何か、またスンナの医学がいかに関心されているのかという問いを通して、東アフリカにおける「民衆のイスラーム」とは何かを明らかにすることである。

第I部では、先行研究における本書の位置付けおよび、調査地の歴史的背景について述べられている。

第1章では、これまでの「民衆イスラーム論」をめぐる先行研究をもとに、理論的な検討がなされている。人類学者であるロバート・レッドフィールドによって提示された「大伝統 (great tradition) / 小伝統 (little tradition)」という概念は、G.E. フォン・グリュネバウムによってイスラーム研究に取り入れられた。グリュネバウムの主張した、宗教的エリート層が担う「公式イスラーム (official Islam)」と、公式には否定されたり軽視されたりする「民衆イスラーム (popular Islam)」という枠組みは、後のイスラーム研究の論者にも引き継がれている。アブドゥル・ハミッド・エル・ゼインは、秩序ある「大文字単数形のイスラーム (Islam)」と、日常的な経験である「小文字複数形のイスラーム (islams)」を提唱している。

これに対し、デイル F. アイケルマンは、ゼインの示した「小文字複数形のイスラーム (islams)」が、教義を単一のものとして捉えてしまうことや、多くのムスリムが教義に基づいて実践を行っているという側面を無視してしまうと批判している。これに続く論者たちも、「公式イスラーム」/「民衆イスラーム」という二元論的な枠組みに問題があるとし、議論を展開している。著者は、こうした二分法がイスラーム理解のために設定されたにもかかわらず、「民衆イスラーム」の軽視を招いてしまったこと、時代や地域によって異なるイスラームの動態を捉えきれていないことを指摘している。

こうした二分法をめぐる議論とは一線を画すものとして著者はアーネスト・ゲルナーの「振り子理論」を挙げている。ゲルナーの「振り子理論」とは、学識を重視し、厳格で神秘主義を重視しない正統なイスラームを P 極、儀礼と神秘主義を重視し、頻繁に変容するイスラームを C 極とし、現実の社会現象はこの二極の間を振り子のように揺れ動くのだという理論である。さらにゲルナーは、この両極に「都市的イスラーム」と「田舎のイスラーム」という二項を当てはめたが、神秘主義を担う「スーフィー (修行者)」たちがイスラーム諸学にも精通していたという事実があることから大きな批判を受けたのである。

このように、「公式イスラーム」と「民衆イスラーム」という区分をめぐって交わされ

た議論は、民衆イスラーム研究の進展に大きく貢献したと著者は述べている。また、東アフリカのイスラーム研究の文脈においては、ジョン・スペンサー・トリミングムによる信仰と儀礼の分類に言及し、ここでもなお「純粋なイスラーム」と「迷信的なイスラーム」という二分法が見られることを指摘している。そして、地域のイスラーム化はイスラームの地域化や現地化と相補関係にあるという小杉の議論に触れながら、東アフリカにおいては、このイスラームの現地化こそが「迷信的」イスラームとして論じられてきたのだと主張している。

こうした議論を踏まえた上で著者が主張するのは、ムスリム自身にとって、イスラームの概念はただ一つであること、また、何が正しいイスラームであるのかを判断するのは、ムスリム自身であるということである。そして、民衆イスラームが公式イスラームの対極にある劣ったものという視点から脱却し、あらたに「民衆のイスラーム」という用語をもって、民衆を主役としたイスラーム像を描くことが本書の主眼となっている。

第2章では、本書の調査地であるザンジバルと、それを包括する東アフリカ沿岸部のスワヒリ文化の歴史について述べられている。ソマリア南部からモザンビーク北部にかけての海岸地方や島嶼部を指すスワヒリ地域には、1330年、モロッコ生まれの旅行家であるイブン・バトゥータが、マッカ巡礼の後に訪れたことが記されており、これが同地域についての最古の記録である。イブン・バトゥータが訪れたモンバサとキルワでは、住民はスンナ派シャーフィイー学派に属しており、信仰深かったとされている。また、スワヒリ地域は、インド洋を往来する人々を通して言語や文化が形成された。商人としてやってきたムスリムが東アフリカで妻子を持つことが多かったことや、ペルシャ湾岸地域やアラビア半島南部といったイスラーム圏と直接的な繋がりを保ち続けていたことが背景となり、イスラームを基盤としたスワヒリ文化が形成されていった。ザンジバルもまた、その交易の拠点として繁栄した。

しかし、大航海時代に入るとポルトガルがこの地域に進出し、その後は勢力を拡大した、ブーサイド朝の支配下に入った。ブーサイド朝は、現在のオマーンにあたる。ブーサイド朝の王であったサイドをはじめとする歴代のザンジバル王たちは、イスラーム法に基づいた統治を行うため、現イエメンのハドラマウトからイスラーム法学者を招聘した。また、この頃からタリーカの指導者がザンジバルを訪れ、交易路を辿って活動するようになり、周辺地域のイスラーム化に貢献したとされる。1870年代からザンジバルは保護領としてイギリスの統治下に置かれる。イギリスはザンジバル住民をアラブ人・インド人・アフリカ人¹に分けて序列化し、分割統治を行った。1963年にザンジバルがイギリスから独立した時、政治面で主導権を握っていたのはアラブ人を主体とする政党と、先住のザンジバル人を主体とする政党であった。この二つの政党と、アフリカ人から成る政党の間に衝突が起き、ザンジバル革命へと発展する。アフリカ人たちが主導権を握るに至ったこの革命により、多くのアラブ人たちが殺害され、ザンジバルからの退去を余儀なくされた。そしてこのようなアラブ人のなかにはイスラームの知識人たちも多く含ま

1 アフリカ大陸出身者を指している。

れていたとされる。本章の主題となった歴史的背景は、第5章で述べられるように、ザンジバルにおけるタリーカの変容の要因となる。

第II部では、東アフリカおよびザンジバルにおけるタリーカが主題となっている。第3章では、東アフリカに多数存在するタリーカの形成と、それぞれの概要が述べられている。主な教団として、アラウィー教団、カーディリー教団、シャーズィリー教団などが挙げられる。著者の調査によれば、現在ザンジバルにおいて最も広く普及しているのはカーディリー教団であるが、神との合一体験を目指すことが共通の目的であるという点において、タリーカごとの違いはほとんどないとされている。都市部のみならずほぼ全ての村に活動拠点が存在しており、モスクや広場を活動場所として、スーフィーの中心的な修行である「ズィクル（唱念）」が行われる。ズィクルとは、神との合一体験を目指し、神の名を繰り返し唱える修行を指し、ザンジバルではスワヒリ語で「ズィクリ」と呼ばれる。後述するスンナの医学において、ズィクリは聖典クルアーンや「ハディース（クルアーンの解釈学）」では認められないものとして、排除されている。

第4章では、著者の現地調査に基づき、「マウリディ」と呼ばれる預言者聖誕祭について記述されている。この預言者聖誕祭はアラビア語で「マウリド」と呼ばれるが、東アフリカにおいては預言者の生誕を祝う詩や、誕生日、割礼、結婚式などの意味も含んで広く使用されている。著者によればズィクリもここに含まれる場合がある。著者が観察を行ったマウリディでは主にクルアーンや詩の朗唱、ズィクリが行われている。

続く第5章では、ザンジバルにおけるタリーカが、いかにして現在の姿に変容したのかについて、歴史的側面に焦点を当てて考察されている。ここで著者は、預言者ムハンマドにまでさかのぼることができる系譜である「スィルスィラ」の有無に着目している。著者の調査の結果、スィルスィラを有するタリーカは、カーディリー教団とシャーズィリー教団であったと述べられている。また、通常であれば指導者の名前が教団名となることが多いが、ズィクリ名が教団名となっている教団も存在することが調査の結果明らかにされている。著者はこうしたザンジバルにおけるタリーカの変容には、二つの要因があるとしている。一つ目に、タリーカの担い手の変化である。イエメンのハドラマウトから招聘された知識人たちによって保持されていたイスラームの知識は、19世紀以降、ザンジバルを訪れたタリーカの指導者たちによって、アフリカ系の人々へと、徐々に裾野を広げるように広がっていったのである。二つ目には、ザンジバル革命の影響である。多くのアラブ人が殺害され、ズィクリを重視するタリーカは活動を制限された。そのような状況下で消滅したタリーカやスィルスィラの破棄を余儀なくされたタリーカもあったと著者は考察している。

第III部では、タリーカからスンナの医学へと、主題が移される。まず第6章では、スンナの医学の基礎となる預言者の医学について述べられている。預言者の医学とは、ムハンマドが教えた医学という意味であり、クルアーンとハディースに基礎を置く医学であるとされる。病は精神的な病と身体的な病に分類され、全ての病に対して治療法が存在するとされている。預言者の医学は形成過程において、ギリシャ医学の影響を受けていることを著者は指摘しているが、アルコールのような、イスラームで禁止されているものの使用は

認められなかったと述べている。

第7章では、ザンジバルにおける医療の類型化が行われている。主として検討されているのは、伝統的医療の「ウガンガ」と、預言者ムハンマドの慣行である「スナナの医学」であり、著者はこれらを「イスラーム的」医学と捉えている。ザンジバルではこれらのイスラーム的医学が西洋医学や中国・韓国系の医学、アーユル・ヴェーダなどとも併存している。著者はここでイスラーム的要素を含む治療儀礼は、先行研究ではアニミズム的要素が混交した民衆イスラームとされ、イスラーム学の知識のひとつとしては捉えられてこなかったことを指摘している。また、調査の結果、病や問題の原因として「ジニ」という精霊の存在が関わっていることを明らかにしている。発病した患者は、まずは西洋医学を受診することが多いが、原因がジニである場合、その他の医療を利用していると述べられている。

第8章では、ウガンガとスナナの医学の比較が行われる。主な違いは、スナナの医学がクルアーンやハディースに基づいた実践であるのに対し、ウガンガでは、クルアーンやハディースでは認められない歌やズィクリ、占いなどが行われることである。著者が両者を比較するなかで特に強調するのは、共通して見られるクルアーンの朗唱について、スナナの医学ではオーディオ機器が使用されるのに対し、ウガンガでは使用されないことである。これについて著者は、オーディオ機器を用いることで一度に多くの患者に対してクルアーンを聴かせることができるという利点があるばかりでなく、異性の患者に直接触れることなく治療が可能であると説明している。クルアーンやハディースでは、異性の体に触れることが禁じられているため、これに基づいた治療が可能になるのである。このような差異を持つ二つの医療について、スナナの医学は、ウガンガから、クルアーンとハディースに基づく実践だけを抽出するように発展したものであると考察している。

第9章で著者は、スナナの医学の実践について具体的な事例をまとめている。その症例は、胃潰瘍のように西洋医学でも病とされるものから、肥満や不治の病、人間関係に至るまで多岐にわたる。これらの事例の検討を通して明らかにされているのは、西洋医学では病と診断されなかったものは、ジニであると診断されることである。また、ジニであると診断された患者は、長期にわたってスナナの医学の治療を受けることになる。そしてクルアーンやハディースに基づくスナナの医学を実践することは、彼らにとって敬虔なムスリムとして、イスラームに忠実に生活することを可能にしていると著者は述べている。

第IV部では、本書を通して検討してきたタリーカとスナナの医学をもとに、東アフリカの民衆イスラームがいかなるものであるのかについて考察がなされている。

第10章では、ザンジバル革命後の政策の転換やイスラーム復興といった動きのなかで、イスラームの知がどのように変遷してきたのかについて述べられている。なかでもクルアーンやハディースに忠実であろうとする「アンサール・スナナ」の思想には、多くの人が傾倒するようになった。今ではタリーカを批判する人が多くなっている一方で、依然としてタリーカが消滅することはなかったことを著者は強調している。

11章では、前述のアンサール・スナナの担い手たちこそが、ウガンガのなかからクルアーンやハディースに基づく実践を抽出し、スナナの医学へと改革したのだと述べられて

いる。秘技的な知識が必要なウガンガに対し、クルアーンやハディースに基づいて簡略化され、スワヒリ語で知識を得ることが可能であったスンナの医学は、一般の人々にも開かれたものであった。そして、正しいイスラームの実践を求める風潮に後押しされるように、スンナの医学は東アフリカにおいて広く支持されるようになったのである。

終章は、本書の全体を振り返る総括となっている。

ここまで、本書を章ごとに追い、その概要を述べてきた。以下では本書に対する評者の見解を述べる。まず、先行研究が少なく、多数存在する東アフリカのタリーカについて、広汎かつ精緻な調査が行われていることは何よりも高く評価されるべきである。また、スンナの医学に関する治療者と患者のやりとりも活写されており、まさに民衆を主役とするイスラームが読者の前に立ち現れてくるような記述となっている。特に、アンサール・スンナの思想の担い手たちは、これまで正統イスラームに対して劣ったものとされてきた民衆イスラームの担い手である。彼らが自らクルアーンやハディースに基づいて正しい実践を選び取ってきたという事実は、正統イスラーム対民衆イスラームという単純な対立の図式を軽やかに飛び越える。さらに、イスラーム知識人だけでなく一般の人々にも開かれたスンナの医学と、イスラームに忠実であろうとする彼らの姿は、公式イスラーム対民衆イスラームという、不毛に繰り返される二項対立からも脱却しうる最良の事例である。

以上のような評価点を踏まえてなお、評者にとって疑問として残るのは、当該地域において何が「イスラーム的な正しさ」とされ、いかに治療内容が精査され、取捨選択されたのかというプロセスである。例えば、第Ⅲ部 8 章において、クルアーンの朗誦や薬草類、占い、などといった治療に使用される物や行為をもとにウガンガとスンナの医学の比較が行われている。ここでの著者の主張は、「現在のスンナの医学は、治療者がクルアーンとハディースに基づいてウガンガの内容を精査し、取捨選択した治療方法なのである」(153 頁)ということである。その根拠となるのは治療に使用される物や行為の有無であるが、実践の場面でこれらはどのように評価され、「イスラーム的な正しさ」がいかなる理由付けのもとで担保されているのであろうか。このような点が明らかにされれば、冒頭部分で著者が述べていた、「何が正しいイスラームかは民衆が決める」という主張がさらに説得力のあるものになるだろう。複雑なイスラームの知の体系に配慮しながら調査を進めるのは至難の技であるが、今後の著者の研究の発展に期待を寄せたい。

ここまで評者の見解を述べてきたが、先行研究の手薄な地域において、民衆を主役としたイスラームの実践を細やかに描いた本書は、資料としての価値の高さもさることながら、イスラーム研究を刷新するものとして一読の価値がある。